

特集

盛岡の価値を発信! 「盛岡つなぎ温泉」の試みは今。



御所湖のほとりにある「盛岡つなぎ温泉」。四季折々の景観を楽しめて利便性の高い観光拠点です。

ニューヨークタイムズが選んだ「2023年に行くべき52カ所」の一つに紹介された盛岡市。新型コロナウイルスの5類移行から1年を経て、その影響は観光客の動向にも現れているようです。今月は、盛岡の奥座敷「盛岡つなぎ温泉」にて、観光客の変化や温泉独自の取り組み等を伺いました。

訪れる観光客の変化

2023年4月、「つなぎ温泉」は正式名称を「盛岡つなぎ温泉」に変更しました。900年を超える歴史のある温泉地ですが、呼び名の変更については以前から話題に上がっていたことです。「盛岡つなぎ温泉観光協会」副会長の菊地義基さんは、その経緯を話します。

「つなぎ温泉は一体どこにあるのか？岩手県の盛岡市にあることを明確に知ってもらうためには、盛岡の地名と合わせて発信していく必要性を感じていました。そうした中、ニューヨークタイムズで盛岡が国内外から注目され、大きな弾みとなったのです。盛岡の価値向上と合わせて、つなぎ温泉のネームバリューを上げていく絶好のタイミング。タイムズの紹介記事原文を取り寄せて各旅館に配布するなど周知に努め、名称変更に伴う実務に動きました」。

印刷物、バス停留所や路線案内、看板表記、社内アナウンスなどを一気に変更。そして、同協会ではこの機会を生かすべく、台湾方面へも積極的に営業活動を進めてきたそうです。「台湾方面からのお客様は以前から多く、数字的に大幅な変化はないものの、デンマークやフィンランドなど、北欧からのお客様も増えつつあります。北欧は酪農王国で、小岩井農場は酪農とビジネスと一体化した貴重な事例のようです。インバウンド受入宿泊施設の記録を見ると、ヨーロッパ方面からの客数は2018年に15名、2023年に528名。タイムズ掲載は少なからず英語圏に影響を及ぼしたと推察されます」と菊地さん。ニューヨークタイムズの掲載実績は一時的なものではなく普遍的な価値として、誇りを持って発信を継続していきたいと話します。

魅力に彩りを生む、独自事業

客観的な視点で見ると、「盛岡つ

なぎ温泉」は盛岡の価値そのもの。中心市街地から車で20分圏内にあるアクセス、温泉一帯の自然景観や環境は、日本の代表的な観光地に引けを取らない魅力にあふれています。菊地さん自身、改めてその魅力を感じる機会が増えているのだとか。

「盛岡を含む岩手県は海も山もあり、豊富な食資源に恵まれています。県内を周遊することで、全く異なる景色や文化を体験できる贅沢な土地。台湾からの旅行客も、まずは東京や京都に向かうようですが、次に見たいのが雪景色や桜だといいます。北東北はその2つを同時に見られる絶好の旅行地。これは海外の方に限らず、なかなか巡り合えない環境だと再認識しています」。

景観や食べ物だけでなく、コトとしての「盛岡つなぎ温泉」らしさを掘り起こすべく継続してきた事業が



「盛岡つなぎ温泉」の価値発信に向け、さまざまな構想を持つ副会長の菊地義基さん。

あります。それが2020年度からはじまった「つなぎでつなぐ盛岡さんさ踊り」の企画です。8月の祭り期間以外にも宿泊客がさんさ踊りを楽しめるよう、初年度は162公演を開催し、1万人以上が観覧しました。その後、コロナ禍ながらも企画を継続し、2023年度は4月から10月まで毎日開催。今では「盛岡つなぎ温泉」の恒例企画となっています。



「つなぎでつなぐ盛岡さんさ踊り」は、4月から10月まで毎晩100名ほどの宿泊者が観覧。11月から3月は毎週金・土曜日に開催しています。

地元の人のこころ見てほしいさんさ踊り

同企画の特徴は、司会を各旅館が持ち回りで受け持ち、バスを所有するホテルが送迎を担当。さんさ踊り



誰もが参加しやすい「福呼踊り(ふっこおどり)」の振り付けのレクチャーにより、場も盛り上がります。

の起源やバリエーションが生まれた経緯について、協議会から講習を受けるなど、事業者が可能な限り当事者として関わっていることです。

「宿泊者のためにスタートした企画ですが、つなぎ温泉の従業員が地域の文化を学ぶ貴重な機会になっています。また各団体にとっても演舞披露の機会が増えることでモチベーションも上がり、伝統継承の後押しに良い影響が出ているようです」と継続の成果に確かな手応えを感じる菊地さん。

昨年度からは観覧するお客様に簡単なレクチャーをしたり、踊り手と一緒に写真撮影をするなど、参加型の企画に取り組んでいます。現在は12のさんさ団体が出演。およそ30分

の演舞をロビーの椅子に座ってしっかり観覧できるさんさ踊りは他に例がなく、盛岡市民にとっても深く広くさんさ踊りを知る機会になりました。インバウンド向けに英語や台湾語のアナウンスも検討中です。

「宿泊客、主催者、各さんさ団体、市民や観光関係者との情報共有や告知にも力を入れていきたい」と菊地さん。温泉街全体の賑わいや回遊性も課題の一つで、若手がカフェを出せるようなチャレンジショップの受け皿整備にも取り組んでいきたいと話します。



つなぎ温泉限定の「ワッフルクッキー」や「つなぎ温泉ミスト」などオリジナルアイテムも好評です